

Ⅳ．柏野学区の町内会

1. はじめに

この章では町内会を中心に、地域の集団へのひとびとの関わりについて分析を試みることを課題としているが、はじめに、地域においてひとびとの組織化や団体所属を条件づける地域の特徴について概観しておこう。

機業の集積されてきた地域として、私たちが「西陣」と想定した領域は、北大路通、烏丸通、丸太町通、西大路通にほぼ囲まれた地域であり、このなかには17の学区が含まれている。これらの学区における西陣織生産への関わりは一樣ではなく、織元の多い学区もあれば、賃機が多い学区もある。また織物関係の少ない学区もある。私たちはすでに、西陣学区について一定の分析を試みた二つの調査報告と、西陣地域の13学区を対象とした調査報告の一つを行っている。今回の調査対象地である柏野学区を昭和60年国勢調査に基づく『元学区統計』でみると、まず人口構成において65才以上が17.4%で、西陣学区の16.7%より高い。京都市は11.4%、北区12.6%、上京区16.8%であり、柏野学区がかなり高齢人口の多い地域であることを伺い知ることができる。持家率は柏野学区が56.0%で、西陣学区の47.0%と比べると高い。（西陣学区は私たちの世帯主を対象にした調査では、「公団住宅」が9.5%を占めているし、「借間・下宿」などが多くなっている。民間借家は柏野学区の方が多くなっている。）さらに柏野学区で繊維工場が対世帯数比で0.31と、これらの学区のなかで最も高い。だが逆に、一工場当たりの従業者数では2.21と最も低く、工場はそれほど多くなくて織元の多い前回の調査地の西陣学区と比べて、零細な賃機層の多い地域といえる。これらの点は、地域を特徴づけるものとして最も基礎的なものであろう。つづいて学区の歴史的な成立についてふれよう。

「ほんまの西陣」と俗に呼ばれる桃蔭、嘉楽、

西陣、乾隆、成逸の5学区は、西陣織の発祥にまで遡るほどに歴史的にみてふるく、小学校も明治に入りいづれも翌年の明治2年に開校されている。これに対して柏野小学校は、第四待鳳小学校として昭和14年に開校され、明年の昭和64年に創立50年を迎える。なお、待鳳小学校は明治6年開校、第二待鳳小学校・現紫野小学校は大正14年開校、第三待鳳小学校・現鳳徳小学校は昭和6年開校されている。このように人口の増加にともなって一帯に小学校が開校されていく過程は、「ほんまの西陣」の北西部へと織物生産がのびていき、柏野一帯が機業地として拡大されてきたことを物語っている。これらのことは、調査対象者の属性としてみることができる。すでに第2章でふれられているが、いくつかの点で確認しておこう。

世帯の居住歴は、西陣学区が「明治期以前」で15.8%であるのに対して柏野学区では2.7%と低い。柏野学区は「昭和に入ってから終戦まで」の期間が37.2%と最も高い。逆に「昭和50年以降」については西陣学区が18.0%、柏野学区が10.7%で、西陣学区での移動性が高い。西陣学区はふるくからの人もいるが新しい人もいる。これに対して柏野学区は昭和にはいつてから高度成長期くらいまでに移ってきた人が多い、といつてよいだろう。

世帯主の年齢でみると、西陣学区が「40才台」が24.5%で最も高いのに対して、柏野学区では「50才台」が25.5%と最も高く、「60才台」「70才台」ともに柏野学区が高く、西陣地域のなかでも高齢者の多い学区といえよう。家族構成も柏野学区は西陣学区に比して員数が多く、多世代型になっている。職業構成では、西陣学区が「生産工程従事者」が15.9%、「管理職」が10.6%となっているのに対して、柏野学区ではそれぞれ42.7%、5.2%ときわだった違いをみせて

いる。さらに西陣織との関係でみると、西陣学区では31.3%が関係のある職業についていて、そのうち最も多い職業が製織の16.5%であるのに対して、柏野学区では47.8%が西陣織に関係のある職業についているとし、そのうち36.0%が製織としている。西陣学区と比較してみても、

歴史的にもまた経済的にも随分と異なった位置にある柏野学区において、人々の地域生活のあり様はいかなるものであろうか。そしてそれは西陣学区といかなる違いをみせるのであろうか。地域での集団所属をとおしてみられる人々の意識と行動についてみてみよう。

2. 地域の団体への参加

(1) 諸団体への加入率

柏野学区は比較的質機層の多い、高齢者の町とみられる。そして、ひとびとの生活基盤であるそれらの地域の特性と結びついて、地域が組織されていると考えられる。だとするならば、ひとびとの団体所属をみることによって逆に地域の問題状況をたぐり寄せることもできよう。数量調査の限界を認めつつ以下分析を試みよう。

地域にあるさまざまな団体を機能的に区別してみると、(1)地域のひとびとが世帯や年齢、性などによって、ほとんど自動的に組織される団体(町内会・自治会、青年会・婦人会・老人会、PTAなど)、(2)経済的な利害に関わって形成される団体(商店会・同業組合など)、(3)政治的な関心に関わって形成される団体(政治団体・議員の後援会など)、(4)趣味や宗教など生きがいにつながる団体(サークルや宗教団体など)といったように、基本的に4つの類型が考えられる。柏野学区で個人に、代表的な団体への加入をたずねた結果が表Ⅳ-1である。西陣学区と比較して柏野学区で最も特徴的だと思われる

点は、まず全般的に見て団体への加入率が低く、したがって地域の組織的な活動がやや低調ではないか、といった印象をあたえる。前述した製織などの家内工業的職種の比較的多いこの地域の特徴からみて、(1)のタイプの団体への加入率は比較的高いのではないかと予想されるが、必ずしもそうとはいえないようである。例えば、高齢者が西陣学区より多いので、老人会への加入率が当然に高いように思われる。個人調査では「青年会・婦人会・老人クラブ」といったように三つのものをいっしょにたずねていて、正確に判断しかねるので、世帯主調査によってその項目についてみると、13.0%で、西陣学区の16.8%より低くなっている。また、「繊維不況」といわれる和装織物業の混迷のなかで少しでも状況を変えていくために、逆に(2)ないし(3)のタイプの団体への加入率が高いかといえそうでもない。数字の上だけのことで確定的なことはいえないが、機業の後退で活路を見出しえないでそのまま地域が停滞しているかのようである。とはいえ、加入している団体へのコミットメントの度合いになると多少異なった印象もあたえる。とくに町内会を中心に、この点についてみることにしよう。

(2) 柏野学区の町内会

町内会のあり方については、いくつかの異なった見解があるが、私は西陣の町内会を通して提起された二つの見解を整理して、これまでに西陣学区で検証を試みている。それは、町内会を松本通晴氏の、私の名付けるところの「人情の共同体」とした見解と奥村達夫氏の「義理の共同体」とした見解である。町内会が奥村氏によれば形ばかりの「煩わしいもの」であるかのよう描かれることになるし、一方松本氏の結論

表Ⅳ-1 地域団体との加入率

団 体	柏野学区	西陣学区
1. 町内会・自治会	74.4	80.9
2. 青年会、婦人会、老人クラブ	24.1	33.3
3. P T A	14.4	15.7
4. 趣味スポーツなどのグループ・サークル	14.2	19.2
5. 同窓会、県人会	11.7	16.0
6. 信仰・宗教の団体、人格の向上を目標とする団体	13.4	17.0
7. 政治団体・議員の後援会	9.9	13.4
8. 商店会・同業組合	10.5	14.2
9. そ の 他	3.3	4.2

によればひとびとにとって「近隣の実質的な関係をもつもの」になるのである。ではいったい、現状ではどうみることができるのであろう。私たちの調査した結果からは、西陣学区においては必ずしも奥村氏のように言い切れるわけではないとする結論を得た。だからといって何か西陣学区のすべての町内会に、地域のひとびとの積極的な関係がみられるかといえば、そうともなかなか言いにくかったのである。改めて、こうした点について柏野学区で検証してみたい。

まず町内会への加入率は、さきにふれたように個人を対象にした調査では西陣学区が80.9%（世帯主を対象にした調査では77.8%）、柏野学区が74.4%（同様調査で79.8%）で柏野学区がやや低い。しかし世帯主では逆の結果になっている。これは西陣学区が単身世帯を多く含んでいる結果からではないかと推測される。

「もっとも強いつながりを感じている」とした団体は、ほぼ西陣学区と同様な傾向をしめしながらも、とくに「町内会・自治会」では56.9%（西陣学区51.9%）と高い。西陣学区がいくぶん形式的（つきあい上の）参加の傾向があると推測されるのに対して、実質的参加が柏野学区で多少とも求められているといえるかもしれない。その理由をみるとそうしたことをやや裏付けているようである。「義務」27.1%（西陣27.5%）、「人とのつきあいがほしい」26.4%（西陣24.8%）、「いろいろと身につくことが多い」19.1%（西陣18.8%）、「義理」9.5%（西陣9.1%）、「地域のために尽くしたい」8.3%（西陣7.8%）と続いていて、わずかではあるが全般的に西陣学区に比して柏野学区で高く、地域と結びつこうとする力があるように思える。

「町内会・自治会があった方がよいか」との問いに対して、柏野学区では80.6%で西陣学区の82.3%よりやや低く、「なくてもよい」は柏野学区で5.3%で西陣学区の3.4%より高い。その理由として、柏野学区と西陣学区とのあいだでの違いは、前者で「町内の親睦・精神的まとまりのため」が69.7%、後者で66.3%、「市や府からの連絡事務のため」が7.4%、後者で11.4%と回答されている。柏野学区がどちらか

といえばより実質的な関係が町内会で求められているのに対して、西陣学区ではいくぶん形式的なつきあいとして町内会が捉えられているようにみえる。このような点について、さらに「西陣織関係者」と「非西陣織関係者」といった視点からみてみよう。

4つのタイプの集団で、「非西陣織関係者」が「西陣織関係者」と同じような傾向で加入している「宗教団体」以外は、みな参加の割合において低い。産業としての「西陣」が地域としての「西陣」に重なってある程度、地域内で社会的なネットワークを形づくっていることを推測させる。さらに「もっとも強いつながりを感じる団体」は、「非西陣関係者」では「同窓会」「宗教団体」にやや高いといえるくらいで、「西陣関係者」の方に参加の姿勢がみうけられる。

「その団体にもっとも強いつながりを感じる理由」については、「西陣関係者」と「非西陣関係者」のあいだの違いで特徴的と思える点は、前者が「義務」「地域のためにつくしたい」「仕事に役に立つ」が後者に比してやや高いのに対して、後者は「義理」「人とのつきあいがほしい」「いろいろと身につくことが多い」が前者に比してやや高い。さらに「町内会・自治会があった方がよい」とする回答は「西陣関係者」の方に多い（83.9%、非西陣関係者77.5%）。その理由としては、「西陣関係者」では「町内の親睦・精神的なまとまりのため」が高い（73.0%、非西陣関係者66.9%）のに対して、非西陣関係者では「住民自治のため」（15.2%、西陣関係者11.3%）、「市や府からの連絡事務のため」（7.6%、西陣関係者5.7%）といったように、微妙な差ではあるが違いをみせている。このようにみえてくると、柏野学区は西陣学区とやや異なった地域的性格をもっていて、地域の団体への参加はどちらかといえば、消極的であるが、参加しているひとびとにとってはより積極的に地域の団体がとらえられようとしていて、その傾向は「西陣関係者」に多少強いようにみることができる。とくに町内会に関しては、「西陣関係者」が従来のあり方をそのまま認めようとしているのに対して、「非西陣関係者」はその役割をより自分たちにそくしてとらえようとしてい

るように見える。柏野学区は住民の地域の諸集団への関わりをみるかぎり、西陣学区とやや異なった地域的特徴をもっている。しかし、その

なかで西陣学区的な特徴を西陣織関係者がもっている、といえるように思える。

3. 町内会の活動

(1) 地域の課題と町内会

では、町内会・自治会は実際の地域の問題に対して、いかなる役割をはたしているかと町内のひとびとにみられているのだろうか。

ところで、地域の生活環境で「困っている問題」について世帯主が回答した結果が表Ⅳ－２である。柏野学区に生活環境として問題とされるような点が多いと受けとめられている。柏野学区と西陣学区と同じように問題があるとされているのが「交通事故の危険が多い」（前者が26.9%，後者が26.7%）である。狭い通りやロージの多い西陣では、共通した悩みといえるかもしれない。さらに柏野学区では「緑が少ない」（30.4%）、「家が建てこんで日あたりが悪い」（27.3%）、「学校・子供の遊び場など教育・保育の環境が悪い」（19.2%）などがとくに問題とされていて、西陣学区と比べると、地域の環境整備で遅れているとみられている。では

このような地域の課題にたいして、住民は「望ましい解決方法」をどのように捉えているのだろうか。

地域に何かと環境問題が多いとされた柏野学区で「市（区）役所に直接たのむ」（18.2%）、「地元の有力者にたのむ」（10.9%）、「議員にたのむ」（9.0%）が高く、「町内会・自治会にたのむ」はわずかに0.1%といったように、町内会や自治会の役割としてこれらの問題を解決していくことがほとんど期待されていない。これに対して西陣学区では「市（区）役所に直接たのむ」（18.5%）、「町内会・自治会にたのむ」（9.7%）、「議員にたのむ」（6.2%）、「地元の有力者にたのむ」（2.0%）となっていて、問題の解決のしかたに違いがみられる。とりわけそれぞれの学区で町内会のとらえ方にかなりの違いをみせている。さらには、「解決のため運動組織をつくる」が柏野学区で5.1%と、西陣学区の3.9%よりいくぶん高く、興味深い結果をあらわしている。西陣学区では伝統的な基盤によって地域がまだ支えられているのに対して、柏野学区ではむしろ新しいものへの期待といった力が多少働いているように見える。いずれにしろ町内会に対しての受け取り方は、このような問題では二つの学区が大きく異なっている点で、まことに示唆的である。

(2) 町内行事への参加

町内会の行事への参加の度合いをたずねた結果が表Ⅳ－３である。西陣学区では「積極的に参加して中心的役割をはたしている」がやや多いが、逆に「町内会・自治会に関心がないので、あるかないかも知らない」とした回答も多く、ふるくからの住民とともに、新来住層といった一定の流動的住民の意識が反映されているとみてよいだろう。柏野学区では「たまに参加する程度」「会費をはらっているだけで、ほとんど参加しない」といった回答が多く、西陣学区と

表Ⅳ－２ 地域で困っている問題

	柏野学区	西陣学区
1. ハエやゴキブリが多い	7.9%	10.0%
2. ゴミの回収が十分でない	1.5	1.6
3. 排水の処理が悪い	1.0	1.8
4. 日用品の買い物の便が悪い	2.1	3.4
5. 交通機関の便が悪い	7.6	11.2
6. 騒音・ばい煙・悪臭がひどい	15.4	19.9
7. 学校・子供の遊び場など教育・保育の環境が悪い	19.2	15.7
8. 交通事故の危険が多い	26.9	26.7
9. 緑が少い	30.4	17.1
10. 道路が悪い	16.2	6.5
11. 近所にはよい医者がいない	3.8	2.2
12. 家が建てこんで日あたりが悪い	27.3	17.7
13. その他	5.4	4.6
14. 特に困ることはない	29.6	30.3
不 明	14.7	5.8
計	209.0	174.4

表Ⅳ－3 町内行事への参加の程度

	柏野学区	西陣学区
1. 積極的に参加して中心的役割をはたしている	6.0%	7.4%
2. 会合や行事があるごとに参加している	22.1	21.8
3. 毎回ではないがよく参加している	24.0	24.8
4. たまたま参加する程度	21.1	20.0
5. 会費をはらっているだけでほとんど参加していない	16.1	13.3
6. 町内会自治会に関心がないのであるか、ないかも知らない	3.4	6.0
不明	7.4	6.8
計	100.0	100.0

比べると、町内会の行事への参加に消極的な姿勢がうかがえる。

比較的フォーマルな行事として、京都のほとんどの町内で、ふるくから行われている地藏盆について具体的にみてみよう。「地藏盆に参回したことがある」とした回答はほぼ同じような結果で、柏野学区88.0%、西陣学区88.7%である。しかし、「地藏盆の意義のとらえ方」となると、微妙な違いをみせている。柏野学区では「町内の親睦をはかる」が67.9%、「子供たちに楽しみをあたえる」が47.2%、「子供に町内

の一員としての自覚を育てる」が16.0%、「子供の宗教的情操を養う」が8.8%となっているのに対して、西陣学区では、それぞれに62.8%、55.5%、16.9%、15.3%で、「意義はない」とした回答が柏野学区に多い(5.2%、西陣学区3.5%)。ことと合わせて、西陣学区のほうがより伝統的な行事として捉えられているようにみえる。

さらに、それほどフォーマルではないが町内の近所づきあいにはかかせない問題にゴミの処理がある。ロージの多いこの地域ではゴミは一定の場所に持ちよることが一般的になっている。ゴミが回収された後、多少汚くなっているその場所の掃除はどのようにされているか。定ポイント収集であるとした回答と無回答を除いて、「知っている」とした回答が柏野学区で48.5%と、同じ問いに対する西陣学区の「知っている」とした回答62.8%に比べてかなりひくくなっている。新来住層の多いと見られる西陣学区の方がむしろ低くなるようにも思えるが、このような結果をみれば、自分の住んでいる町内を自分のものとして捉えようとする力が多少、柏野学区では弱いといえるのかもしれない。

4. 小 括

西陣はもともと西陣織を織った地名である。西陣はそこがあたかも一つの工場であるかのような町であった。そこには「機を織る仕事」を中心に、近隣での生活を規定する「しきたり」や「慣行」といったルールがながい間に形成されていたであろう。しかし「産地の空洞化」が叫ばれて久しい今日、織物としての「西陣」と地域としての「西陣」の間に乖離がすすんでいる。とすれば地域での社会関係も変わっていかざるをえなくなる。

西陣と私たちが想定した領域のなかで、西陣織生産を中心軸にみれば、それぞれの学区の中心軸からの距離には当然に差があるし、むしろ「空洞化」はこの差をいっそう拡大させているといえるのかもしれない。だから、「西陣」と一言でいっていても何をさしてそう呼ぶのかと問

われれば、ますますあいまいになっていることはまちがいない。しかしあえて、「西陣とは何か」を私たちは問おうとしてみたのである。

私の分担した、西陣のひとびとの地域集団への関わりからみれば、「西陣」にはやはり西陣織生産に規定された社会関係の「質」といったものがあるように思える。それが何かと改まって問われればなかなか答えにくい。しかし、西陣学区だけの分析ではなかなか見えてこなかったものがあるように思える。(1)西陣学区は歴史的にふるくから西陣織に深く関わってきた町である。(2)西陣織は官機に起源をもつ日本のなかでも最も「由緒正しき」織物である。(3)西陣学区には今日でも織元が比較的多い。(4)柏野学区は歴史的には新しく、主には賃機層の多い町である。このような文脈に添いながら、ここでの

以下の分析結果を加える。(5)柏野学区より西陣学区のほうが町内会など地域の集団へ参加の力が強い。(6)柏野学区のなかでは西陣関係者の方が町内会など地域の集団への参加の力が強い傾向にある。(7)柏野学区には、地域の問題を町内会などの伝統的な組織に頼らずに、新しい運動組織をつくって解決していこうとする力がある。

以上のようにみてくると、「西陣的なもの」は西陣を取り仕切ってきたひとびとの「織物生産への意識」につながっているのである。それは確かに西陣の「誇り」であり、そうした「誇り」がまたこれまでの西陣を支えてきたに違い

ない。しかし、西陣織生産の衰退といった今日の事態をまえにして、西陣に住みながら西陣に関わらない大半のひとびとによって、西陣のそれぞれの町内が支えられていかざるをえなくなっていることも事実なのである。これらのひとびとのなかの町内への「新たな誇り」こそ求められるべきものであり、「これからの西陣」に思いをはせながら「ふるい西陣」について改めて考えるとき、おそらくは「いまの西陣」は「ふるい西陣の誇り」を「新しい西陣の誇り」に橋渡ししていく 過渡期ではないか、と思えてくる。

(谷口浩司)